

サムエル記第一14章6-15節 「信仰による冒険」

1A ペリシテ人からの救い

1B 士師時代

2B サウル王の抵抗

1C 三千人の軍配置

2C 守備隊長の殺害

3B 圧倒的な差

1C 無数のペリシテ兵

2C 怯え逃げるイスラエル兵

3C 鍛冶屋のないイスラエル

4C 切り立った岩

2A ヨナタンの信仰

1B イスラエルを救うみこころ

2B 「おそらく、味方」

3B 少数が妨げにならない方

4B 主のしるし

1C ペリシテ人の心

2C 我々の手に渡された主

3A 信仰と共に働かれる主

1B わずかな力の討ち取り

2B 全陣営の恐れ

3B 地の震え

本文

サムエル記第一 14 章を開いてください。6 節から 15 節までを読みたいと思います。「⁶ヨナタンは道具持ちの若者に言った。「さあ、この無割礼の者どもの先陣のところへ渡って行こう。おそらく、主がわれわれに味方して下さるだろう。多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない。」⁷道具持ちは言った。「何でも、お心のままになさってください。さあ、お進みください。私も一緒に参ります。お心のままに。」⁸ヨナタンは言った。「さあ、あの者どものところに渡って行って、われわれの姿を現すのだ。⁹もし彼らが『おれたちがおまえらのところに行くまで、じっとしている』と言ったら、その場に立ちどまり、彼らのところに上って行かないでいよう。¹⁰しかし、もし彼らが『おれたちのところの上って来い』と言ったら、上って行こう。主が彼らを、われわれの手に渡されたのだから。これが、われわれへのしるしだ。」¹¹二人はペリシテ人の先陣に身を現した。するとペリシテ人が言った。「おい、ヘブル人が、隠れていた穴から出て来る

ぞ。」¹²先陣の者たちは、ヨナタンと道具持ちに呼びかけて言った。「おれたちのところに上って来い。思い知らせてやる。」ヨナタンは道具持ちに言った。「私について上って来なさい。主がイスラエルの手に彼らを渡されたのだ。」¹³ヨナタンは手足を使ってよじ登り、道具持ちも後に続いた。ペリシテ人はヨナタンの前に倒れ、道具持ちがうしろで彼らを打ち殺した。¹⁴ヨナタンと道具持ちが最初に討ち取ったのは約二十人で、一ツエメドのおおよそ半分の広さの場所で行われた。¹⁵そして陣営にも野にも、すべての兵のうちに恐れが起こった。先陣の者、略奪隊さえ恐れおののいた。地は震え、非常な恐れとなった。」

私たちは、昨日と一昨日、カルバリーチャペル・ジャパン・カンファレンスに参加しました。そこでテーマは、「信仰の従順」です。このテーマを思い巡らしている時に、今、読みました、ヨナタンの、信仰による冒険が、何度となく思い出されました。主のくださったお話だと思います。主は、イスラエルをペリシテ人から救いたいと願われています。しかし、その救いは、ヨナタンが信仰を十分に働かせて、どうなるか分からない中でも、一歩踏み出したところで始まりました。主が、ご自分の心と一つにする人に、力を現されます。今朝は、ヨナタンが、どのように信仰を働かせたのかを見ていきたいです。

1A ペリシテ人からの救い

まず知らなければいけないのは、イスラエル人が置かれた状況です。本来、イスラエルに与えられていた土地です。今、読んだ箇所は、ベニヤミンの相続地です。ところが、ペリシテ人たちがいるということ。ここが理解するのが大事です。イスラエルの地であるにもかかわらず、実効支配していたのは、ペリシテ人です。これは、神のご計画の中では異常事態ですが、しかし長い期間が経てば、その異常が正常化していきます。ペリシテ人が支配しているのは当たり前になってしまいます。心の中では薄々、この抑圧は間違っていると分かっていますが、どうすることもできません。

私たちも、これは間違っている、歪んでいると分かっているが、あまりにも長いこと時を経ているので、それが当たり前、現状だと思っていることが多いのではないのでしょうか？しかし、このままではいけないことも、薄々分かっています。主は、ご自分が動く決められた時に、動かれます。

1B 士師時代

このことが起こったのは、ひとえにイスラエルが主の前に悪を行ったからです。士師の時代、主は、彼らのご自分の前に悪を行っているので、周囲の住民の手に渡されたと言われています。士師記 13 章以降に、主がサムソンを立てられたことが書いてありますが、主の前に悪を重ねて行っていることが冒頭に書いてあります。サムソンは、数多くのペリシテ人を殺しましたが、彼らがイスラエルを虐げて、支配しているところから解放したわけではありませんでした。

そしてサムエルの時代、ついにイスラエルは、自分たちの間にある偶像を捨て去り、サムエルが

いけにえを献げ、必死の祈りをして、主がペリシテ人に戦って下さいました。それで領土を、一部解放することができました。

2B サウル王の抵抗

そしてサムエルが年をとり、次の後継者が必要になったころ、民が人間の王を立ててほしいと要求して、主はそれをお許しになって、サウルを立てられました。ヨシュアたちがヨルダン川を渡って、それを記念する石を積み上げたギルガルにて、サウルを王として即位しました。

1C 三千人の軍配置

そしてサムエル記第一 13 章に入ります。そこには、サウルが三千人を選んで、自分には二千人を、息子ヨナタンには千人を立てました。残りの兵は帰しました。そこは、ベニヤミンの地です。

2C 守備隊長の殺害

けれども、ペリシテ人がそこに守備隊を置いていました。その隊長をヨナタンが殺しました。それで、ペリシテ人を怒らせました。

3B 圧倒的な差

1C 無数のペリシテ兵

そこでペリシテ人はなんと、戦車三万、騎兵六千、そして海辺の砂のように数多くの兵を集めています。ヨナタンは千人の兵、サウルは二千人の兵士しかいません。圧倒的に軍事力に差があります。このような時に、こう思うのではないですか？「ヨナタンは、とんでもないことをしてくれた。」と。イスラエルの人たちが、エジプトで奴隷であった時に、モーセとアロンがファラオのところに行って、わたしの民を出させなさいと言ったら、ファラオがもっと労役を増やしましたね。それでイスラエル人は、モーセを責めました。このままでいいのだと、何度となく言いました。

ですから、何もしないという選択を、私たちは容易に取ってしまいます。波風を立てないようにします。しかし、それはみこころでしょうか？いいえ、違いますね。主がペリシテ人の手からイスラエルを救うことをみこころとしておられます。そのために行動に移した時、必ず、反対があります。今までの状態よりも、もっと大変なことが起こるかもしれません。しかし、前に一歩、踏み出すのです。

2C 怯え逃げるイスラエル兵

あまりにも大きな兵力の差を見て、イスラエル兵は、ひどく追いつめられました。兵士たちは、洞穴に隠れたり、岩間、地下室、水溜の中にまで隠れたりしました。そして、ヨルダン川を渡って、東側に行った人たちもいます。よりによって、ペリシテ人のほうに投降したものたちさえいました。そこで、サウルについていったのは、なんと六百人しかいなくなっていました。

3C 鍛冶屋のないイスラエル

さらに、イスラエルの兵士といっても、あまりにもお粗末な様相を呈したことを、13章の終わりの部分で見ることができます。なんと、彼らには剣や槍がありませんでした。農具はありましたが、剣や槍がなかったのです。なぜなら、鍛冶屋をペリシテ人が仕切っていたからです。イスラエル人たちが武器を持たないようにするために、鍛冶屋を牛耳って、農具を武具に変えないようにさせていたのです。サウルとヨナタンだけが、剣と槍を持っていました。

4C 切り立った岩

そのような、あまりにもお粗末な状況で、比べることもできないぐらいの兵力の差があり、負けるために集めたとと言ってもよいでしょう。そして、ペリシテ人の陣営と、ヨナタンがいるところには、切り立った岩がそれぞれの側にありました。私は、イスラエル旅行でその峡谷のようになっているところを見ました。相手の陣営に行くには、ロッククライミングのようなことを二度しなければいけません。降りていく時、また上っていく時です。

2A ヨナタンの信仰

1B イスラエルを救うみこころ

しかし、ここからが、信仰の冒険の始まりなのです！イスラエルを神がお救いになりたいというのは、はっきりとした神のみこころなのです。それを、ヨナタンは確信していました。疑いのような事実です。もし、救われるのがみこころであれば、後は、そこに心を合わせるだけです。「Ⅱ歴代16:9a【主】はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心をご自分と全く一つになっている人々に御力を現してくださるのです。」主の御力については、何も妨げになりません。妨げになっているのは、心が一つになっていないということです。心が一つになる、つまり、信仰によって神に従順になることです。そうすれば、主ご自身が御力を表します。

パウロが、テモテに第一の手紙で話しました。「1:15「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」罪人を救うために、キリストが来られました。これは、真実であり、そのまま受け入れるに値するのです。このみこころに、私たちがどこまで心を一つにできているでしょうか？神を信じ、そして従順になっているでしょうか？

2B 「おそらく、味方」

14章6節のヨナタンの言葉が、とても大事です。もう一度、読みましょう。「⁶ヨナタンは道具持ちの若者に言った。「さあ、この無割礼の者どもの先陣のところへ渡って行こう。おそらく、主がわれわれに味方してくださるだろう。多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない。」

「**おそらく、主がわれわれに味方してくださるだろう。**」と言っています。ここの「**おそらく**」が、とても大事です。主が、自分たちに味方してくださっているのは明らかです。けれども、主が、今のこの具体的な状況において、戦ってくださるかどうかについては、不確かであります。主が救うことを願っておられるのは明らかですが、その救いが、今、切り立った岩を渡って、相手の陣営に行くようにしておられるのかについては、不確かなのです。

ですから、「おそらく」という言葉は、不信仰から出て来ているのではありません。むしろ、主は、私たちが信仰によって踏み出す時に、すべてをお見せにならないのです。もし見せていたのであれば、それはすでに信仰ではありません。見ないところで、神に信頼して一歩踏み出すからこそ、主は、ご自身を信じる者に救いをくださるのです。多くの人が、信じることと、思い込みを混同しています。自分が信じたら、それは必ず、その通りになることが信仰だと思っています。けれども、違います。主がその状況の中で、働かれようとしておられるのかどうか、その細かいところまでは明らかにされていないのです。けれども、明らかなきところがあるのだから、それに従って動いてみようとするのです。これが、信仰による冒険という意味です。

3B 少数が妨げにならない方

次に、「**多くの人によっても、少しの人によっても、主がお救いになるのを妨げるものは何もない。**」と言っていますね。これは、イスラエルが戦う時に、しばしば出てくる信仰の言葉です。事実、人数が圧倒的に少ないのに、主が勝たせてくださいます。大事なものは、相手と自分を比べないことです。むしろ、主ご自身と相手を比べることです。

私たちが信仰の戦いを戦う時に、しばしば、相手と自分をつなげてしまいます。イエス様は、あなたがたが憎まれるのは、世がわたしを憎んでいるからだと言われましたね。私たち個人を憎んでいるのではなく、私たちがキリストにつながっているところで、相手がキリストを見て、いやがっているのです。サタンは、何とかして私たちが何か足りないとか、私たちがあだこうだと思わせて、戦う意志をくじこうとします。そうではありません。相手が、主に対面しなければいけないのです。

実に、主は少ない人々によって、ご自分のことを行われます。聖書の中でもそうですし、その後の教会の歴史でもそうでした。大きな働きは、少数の人々の、信仰の冒険から始まっています。主から与えられている思いを、先が分からないまま、そのまま実行していくことによって、主が働かれて大いなることをされます。

聖書では、十二弟子に対して、すべての国民を、わたしの弟子とみなさいと命じられたのです。権力の座にも、影響力の全くない、弟子たちにそれを命じられました。しかし、彼らは、その途方もない命令に対して、従順でした。時に、自分たちの思いをはるかに超えていました。だれがステパノの殉教と、その後の迫害で、異邦人への宣教の戸が開かれると思ったのでしょうか？先ほどの歴

代誌第二にある、主のことばにあるように、人数以上に、一人でも二人でも、主と心をつにする人がいれば、主の働きが前進するのです。主は、ただ自分自身を信仰によって差し出すことを願っておられます。

4B 主のしるし

そして 8 節から 10 節までのヨナタンの言葉も、とても大事です。「⁸ヨナタンは言った。「さあ、あの者どものところに渡って行って、われわれの姿を現すのだ。⁹もし彼らが『おれたちがおまえらのところに行くまで、じっとしている』と言ったら、その場に立ちどまり、彼らのところに上って行かないでいよう。¹⁰しかし、もし彼らが『おれたちのところに上って来い』と言ったら、上って行こう。主が彼らを、われわれの手に渡されたのだから。これが、われわれへのしるしだ。』」ヨナタンは、最終的にペリシテ人と戦うことについて、自らしるしをもうけました。これは、理にかなったしるしです。

1C ペリシテ人の心

ペリシテ人が、自分たちのほうに向かってくるならば、そこに、主はおられないと判断します。そうではなく、上ってこいと自分たちが向かうことを誘うならば、主がおられるということです。ペリシテ人の中に、戦う心があるのか？それとも、油断しているのか？その違いで、主がおられることを確かめたのです。主は、人々の心に働いて、事を行われます。主がもし、そこにおられるのであれば、すでにペリシテ人の心に油断を与えておられるはずだとしました。

私たちが犯す過ちには、両極端があります。一つは、何も行動に移さずに、ただ、しるしを待っていることです。ハガイ書には、神殿を建てるのを阻まれたから、「まだ主の時ではない」として、自分の家ばかりを建てていました。みこころに向かって前に進んでいないのです。もう一つの極端は、これこそがみこころだと、勝手に作り上げてしまうことです。何もしないか、あるいは、何が何でも自分でやっていくかの両極端です。そうではなく、信仰の冒険は、そこに主がおられるかどうか、確かめながら前に進むことです。主は、私たちが信仰によって進むことを願っておられます。それで、主がその過程におられることを、私たちが確かめながら進むことを願っておられるのです。

2C 我々の手に渡された主

そしてヨナタンが、大胆に宣言します。12 節です、「先陣の者たちは、ヨナタンと道具持ちに呼びかけて言った。「おれたちのところに上って来い。思い知らせてやる。」ヨナタンは道具持ちに言った。「私について上って来なさい。主がイスラエルの手に彼らを渡されたのだ。」」主が、イスラエルの手に彼らを渡された、と宣言しています。すでに主はそうされた、と完了形で宣言しています。主が、そうされたのだという確信、感触を得たのです。これが信仰によって与えられる確信です。信仰は、これから起こることさえ、起こったものとして受け取ることができるようにされます。

もし、主がされたと知るならば、自分自身でその道を切り開く必要はないのです。主が、もうすで

に事を行われているので、あとは自分が主の言われていることに聞き従うだけです。私たちが、信仰によって、神の恵みにより、救われました。すでに救われたことを確かなものとするために、残された日々を、地上で過ごしますが、これから救われるために何かをするわけではありません。それと同じです。主が事を行われたことを知り、その主の用意されているみわがが、自分自身に現れることを願って、進んでいくのです。

3A 信仰と共に働かれる主

1B わずかな力の討ち取り

それで結果を見てみましょう、「¹³ ヨナタンは手足を使ってよじ登り、道具持ちも後に続いた。ペリシテ人はヨナタンの前に倒れ、道具持ちがうしろで彼らを打ち殺した。¹⁴ ヨナタンと道具持ちが最初に討ち取ったのは約二十人で、一ツエメドのおおよそ半分の広さの場所で行われた。」

ヨナタンは剣で刺して、それで道具持ちが槍でとどめを刺すということをしていたようです。彼らのしたことは、二十人を倒したことです。たった二十人です。しかも、一定の広さのところで行ったことでした。このわずかな信仰による働きが必要でした。

2B 全陣営の恐れ

神に必要なのは、大きな働きではありません。ひたすら従順です。従順になる時に、神は大きく働いてくださいます。彼らは信仰によって従順になりました。そのしたことはわずかなことです。しかし、そこで御力を表します。「¹⁵ そして陣営にも野にも、すべての兵のうちに恐れが起こった。先陣の者、略奪隊さえ恐れおののいた。地は震え、非常な恐れとなった。」主が恐れを呼び起こしたのです。戦いにおいて、最も大きな敵は恐れと言われます。恐れを恐れよ、というある人が言った、有名な言葉があります。主がその部分で戦ってください、彼らに恐れを引き出されたのです。

3B 地の震え

それだけでなく、地震が起こっています。主がご介入されました。それで一気に形勢が変わります。イスラエルの兵士たちが戻ってきます。ペリシテ人にひるがえっていたイスラエル人たちも、戻ってきました。そして、掃討戦をします。彼らを追いかけていくのです。

このようにして、信仰の冒険があります。それは、主の物語です。主がすでに願われていることがあり、なされようとしていることがあります。そこに、私たちがいかに信仰によって、その思いと志が与えられるかにかかっています。御霊によって、信仰の賜物が与えられます。御霊の導きに、どうか従順になってください。言われていることがあるならば、それにしっかりと聞き取ってください。